



第21回(4月上旬号) 『いとしき妻よ、わが鳩よ』 ①誤訳編

by 柴田耕太郎

文法力をつけたいが、無味乾燥な文法書など読みたくない。

そんな読者のために、人気小説の翻訳書に見る誤訳・悪訳を取り上げ、文法面から解説してゆく。題材は最近映画化された『チョコレート工場』の原作者で、日本がロケ地になった映画『007 は二度死ぬ』の脚本家でもあるロアルド・ダール(Roald Dahl)の短編から選ぶ。いずれも原文で10ページに満たない短いものだから、読者も自分で訳してみても、この解説を参考に、市販訳との優劣を競ってみてはいかがだろうか。

冒頭に誤りの種別と誤訳度を示したうえ、原文と邦訳、誤訳箇所を掲げます。どう間違っているのか見当をつけてから、解説を読んでください。パズルを解く気分で、楽しみながら英文法を学びましょう。

今回取り上げるのは、『あなたに似た人』(早川書房、田村隆一・訳)のなかの『いとしき妻よ、わが鳩よ』(MY LADY LOVE, MY DOVE)

誤訳度：*** 致命的誤訳(原文を台無しにする)
** 欠陥的誤訳(原文の理解を損なう)
* 愛嬌的誤訳(誤差で許される範囲)

『いとしき妻よ、わが鳩よ』(MY LADY LOVE, MY DOVE)

[ストーリー]

ポーシャン夫妻は、トランプが強い若いスネイプ夫妻を家に招いた。ブリッジの賭けを楽しもうというのだ。ポーシャンの妻は、若い夫婦の私生活に興味をもって、ゲストの寝室に隠しマイクを設置するよう夫に強要する。ゲームが終って、スネイプ夫妻の会話を盗聴し始めたポーシャン夫妻は仰天した。二人がトランプに強いのも当たり前、秘密の合図で互いに持ち札を知らせ合っていたのだ。

●副詞：**

I lowered my book and looked across at her lying with her feet up on the sofa, flipping over the pages of some fashion magazine.

私は本をさげて、妻の方に眼をやった。彼女は、足を高くあげたまま、ソファにねころんで、ファッション雑誌をパラパラとめくっていた。

[解説]

「足を高くあげたまま、…」だと、「うつ伏せになって脚を空中に立てている」のか「ベッド体操でもしている」のかと読めてしまう。

下線部を一文にすると、**Her feet were up on the sofa.**(彼女の脚はソファの上で上向きである)。つまり、仰向けになっているのだ。これは、しばらくあとで **She had half raised herself up off the sofa,...**(上半身を起して)とあることから確かだろう。脚をソファの肘掛に預けているのかもしれない。cf. **lie with one's face down** (うつ伏せになる) **curl up on the sofa** (ソファの上で膝を崩す、脚を曲げて横になる)

(修正訳)

仰向けになって

●形容詞：**

'You know very well why I asked them,' she answered sharply. 'For bridge, that's all. They play an absolutely first-class game, and for a decent stake.' She glanced up and saw me watching her. 'Well,' she said, 'that's about the way you feel too, isn't it?'

「なぜ招んだのか、あなたの方がよくご存知じゃありません？」と、妻はピシヤリときた。

「ブリッジ、それだけじゃないの。あの人たちは、一流のたのしいゲームをやるし、賭けだってとてもきれいですものね」妻は顔をあげると、自分の方をみつめている私の視線に気がついた、「そうね、あなただってそう思っているんでしょ？」

[解説]

decent は多義だが、ここは多いことの控え目な表現ととるのがよいだろう。例：She earns a decent living.(彼女はかなりの収入がある)。stake は「掛け金」の意。

(修正訳)

結構な額を賭けるし

●形容詞：**

I fetched back the clock. Then I tidied myself up in the bathroom, returned my tools to the workshop, and prepared to meet the guests. But first, to compose myself, and so that I would not have to appear in front of them with the blood, as it were, still wet on my hands. I spent five minutes in the library with my collection.

私は時計をとってきた。それから浴室に入って、こざっぱりしてくると、仕事場に道具を

かえし、客に会う仕度にとりかかった。しかし、まず気分を落ちつかせるために、つまり、罪の匂いを体につけたまま、客の前にあらわれたくなかったし、それに、手がまだぬれていたものだから、私は、書齋で五分ばかり、自分のコレクションをいじっていた。

[解説]

元訳の「手がまだぬれていた」では、風呂から上がったばかりで手が乾いていないと読めてしまう。the blood 以下を一文にすると、The blood,(as it were), is still wet on my hands.(自分の手の表面で血《比喩：汚らわしい行為のこと》がまだ濡れている)。「罪の匂いを…なかった」だけでこの比喩は十分生きている。

(修正訳)

「**つまり、罪の匂いを体につけたまま、客の前にあらわれたくなかったものだから、**」あとの部分、削除。

●副詞：***

‘Quick!’ she cried. ‘Turn it on!’ My wife was always like that, frightened that she was going to miss something. She had a reputation, when she went hunting---I never go myself ---of always being right up with the hounds whatever the cost to herself or her horse for fear that she might miss a kill.

「さ、早く！」彼女が叫んだ、「スイッチをひねって！」私の妻ときたら、なにごとによらず、とりにがすということが大嫌いなたちで、いつもこんな調子なのだ。とにかく、彼女が狩りに行ったときでも---私は絶対に一人では行かないがね---自分や馬がどんな危い目にあおうとおかまいなしに、獲物をのがすまいと、猟犬のあとにくっついて駆けまわるので有名なのだ。

[解説]

myself は I を強調している副詞用法(I myself 《この私自身は》なら名詞用法：意味は変わらない)。「一人では」なら by myself とでもなろう。

(修正訳)

私自身は狩りはやらないが

●イディオム：**

‘I promise, I promise I won’t do it again,’ the girl was saying.

‘We’re not taking any chances,’ the man answered grimly.

「ね、約束するわ、ほんとに約束してよ、もう二度とあんなへましないから」と女が言いつづけた。

「ええおい、チャンスがありあまつてるわけじゃねえんだぜ」と男はすごみをきかせて言った。

[解説]

take chances は「危険を冒す」（この場合、練習に手を抜いて負ける可能性をふやすこと）。それが not any=no で強く否定される。

(修正訳)

どうあっても負けるわけにゃいかねえ

●動詞：***

‘All right,’ the man’s voice was saying. ‘Now we’ll start from the beginning. Ready?’

‘Oh Henry, please!’ She sounded very near to tears.

‘Come on, Sally. Pull yourself together.’

Then, in a quite different voice, the one we had been used to hearing in the living-room, Henry Snape said, ‘One club.’ I noticed that there was a curious lilt, emphasis on the word ‘one’, the first part of the word drawn out long.

‘Ace queen of clubs,’ the girl replied wearily. ‘King jack of spades. No hearts, and ace jack of diamonds.’

‘And how many cards to each suit? Watch my finger positions carefully.’

‘You said we could miss those.’

‘Well---if you’re quite sure you know them?’

「よし、はじめっからやるぜ。いいかい？」

「ね、ヘンリー、ごしょうだから」女は、いまにも泣きそうな声を出した。

「さ、おい、サリー、しっかりしろい」

と、声の調子がまたガラリッと変って、さっきの、あの居間にいたときの声になった。

「ワン・クラブ」はじめの<ワン>をながくひっぱって、奇妙な節まわしがついていた。

「クラブのエースとクイーン」女がいよいよそれに答えた、「スペードのキングとジャック、ハートなし、それから、ダイヤのエースとジャック」

「それじゃ、各組に何枚カードがある？おれの指の位置をよくみるんだ」

「こんなことは失敗なんかしないって、あなた言ったじゃないの」

「ふん、おめえがちゃんと覚えているならな」

[解説]

those は finger positions のこと。この前の場面で、疲れているから練習は全部でなく、指の位置の確認は外そう、と二人で合意しているのだ。この miss は「省略する」の意味。例：miss breakfast(朝食を抜く)。could は、許可。

（修正訳）

それは外すって、あなた言ったじゃない。